

L2地震動に対する ダム形式毎の耐性評価について

平成26年4月22日
商務流通保安グループ
電力安全課

L2地震動に対するダムの耐性評価

第2回開催の電気設備自然災害等対策ワーキンググループでは、L2地震動に対するダムの耐性評価について、検討の進め方として「ダムタイプ毎にダム高、総貯水容量の大きさなどを基に損壊等が発生した場合の影響度を考慮して選定し、事業者から当該評価結果を説明する。」としている。

事業者から当該評価結果を説明するダム

事業者から当該評価結果を説明していただくダムについては、事業者において（南海トラフ巨大地震及び首都直下地震を除き）L2評価が完了しているもののうちから選定した。

ダムの形式		事業者名	ダム高 (m)	総貯水容量 ($\times 10^3 m^3$)	竣工年	選定概要
コンクリート重力ダム		中部電力	27.0	14,492	1936	震度法設計による技術基準制定前のもの
		中部電力	125.0	107,400	1962	南海トラフ影響地域 中空ダム形式でダム高第1位
		電源開発	76.0	193,900	1956	総貯水容量第6位
アーチダム		東京電力	155.0	123,000	1969	ダム高第2位
		関西電力	186.0	199,285	1963	ダム高第1位
フィルダム	ロックフィルダム	四国電力	88.0	5,800	1982	南海トラフ影響地域
		電源開発	131.0	370,000	1961	総貯水容量第1位
	アースダム	東京電力	18.2	92	1912	震度法設計による技術基準制定前のもの

(参考)第2回電気設備自然災害等対策ワーキンググループ(資料5)

3 検討の進め方

全国の評価対象の発電専用ダム数は約300基である。事業者においては、ダム高、総貯水容量等を考慮して、優先順位を付けてL2照査を進めており、全てのダムの照査が完了するまでに時間を要する。そのため、本WGにおいては、現在、事業者において(南海トラフ巨大地震及び首都直下地震を除き)L2評価が完了しているものの妥当性を検討する。

今回、そのうち、以下のダムタイプ毎にダム高、総貯水容量の大きさなどを基に損壊等が発生した場合の影響度を考慮して選定し、事業者から当該評価結果を説明。

- ①重カダム
- ②アーチダム
- ③フィルダム
- ④震度法による設計基準が規定されていなかった技術基準
制定以前のダム

なお、全国の発電専用ダムのL2評価結果については、南海トラフ巨大地震及び首都直下地震を含めた評価を行い、事業者のHP等において順次公表する予定。